

8年前の目の手術、そして

昨日のレポートで、8年前の目の手術・入院についてすこし触れたが、その後の状況を含め記録しておきたい。

名古屋市立大を定年退職して1年半後、右目が見えにくくなり、本を読むことも困難になった。信号もぼやけてしまい、夕方などには危険を感じるようになった。診察予定日を早めてもらって名古屋市立大学病院に行くと、すぐに入院・手術を「宣告」された。病名は「黄斑円孔」であり、網膜中心部の黄斑部に穴（円孔）があき、視力低下、歪視、中心に見えない部分や暗転ができたりする。まさに症状どおりであった。

11月20日に入院して、24日午後に手術を行った。手術前に気がかりなことがあった。血圧の薬をさぼっていたので、入院してから血圧がかなり高くなった。手術できるか心配になったが、なんとか無事に手術ができた。緊張の連続であり、あまり覚えていないが、30分ほどだったと思う。手術が終わって、担当教授が「エアー」と言ったのを覚えている。切除した硝子体に空気を注入したようで、「ガス」だと回復がかなり遅れるので、正直ほっとした。

手術後が大変であった。病室には穴の空いたベッドが用意されており、特製マクラの間に顔を入れ、うつ伏せで寝ることになる。当然、本も読めない、テレビも見えない。ひたすら寝ることになるのだが、頭が冴えて眠れない。そのうち首と腰が痛くなり、ますます眠れなくなる。腰痛の身には、苦痛のベッド生活だった。食事や水を飲むときも、うつ伏せ。検査に行くときも、うつ伏せで歩いた。

1週間近く、うつ伏せ寝とうつ向き姿勢が続いた。11月初旬に人間文化研究所シンポジウムがあり、報告する予定だったので、なんとか早く退院したかった。退院してから、すぐに活動ができるように、早朝などに病棟の「イエローライン」を何回も歩いた。エアーだったこともあり、運良くシンポジウム2日前に退院できた。

その後も定期的に網膜等の検査をしているが、今のところ異常はないが、「後遺症」に悩まされている。右目に違和感が残り、見えにくい状況が続き、活字の小さい本を読むのが辛い。それと緑内障にも悩まされている。こちらの方が心配なので、とにかく眼圧を下げる目薬を毎日2回、欠かさず点眼している。じつは入院した時から、「薬チェック表」なるものを作り、忘れないように心がけている。

(2023年10月

15日)